

BOOK REVIEW

作業療法が生きる地域リハビリテーションのすすめ —いのち輝く生活の支援を目指して—

本書の中に「自宅での日常生活動作がすべて組み込まれていながら他所様に出かけてきたという感覚を利用者に持ってもらいたい」とある。デイステーション涼風（以下、涼風）に一步入ると、目を見張るような設備などはないが、直感的に居心地の良い雰囲気と、お稽古事に来たようなワクワクと少しの緊張を感じる。この空間には利用者のための仕掛けが実に細かく所狭しと置かれているが、自然すぎて気づきにくいぐらいである。評者の限られた経験による考えではあるが、利用者のこころを動かす通所施設には共通して、居場所にしたくなる居心地と、動きたくなる仕掛けがある。

評者が石井晴美先生に初めてお会いしたのは2014年の夏で、東京都作業療法士会主催の研修会で石井先生との二人講師であったため涼風で事前打ち合わせをすることになった。本書にも書かれている涼風の説明や、通われている利用者さんがどのような作業療法を受けているのかなど、実にぜいたくな個人講義をしてくださった。迎え入れてくださる態度のすばらしさに感激した一方で、わが国でまだ訪問リハという言葉聞くことも少なかった頃から、その核心を実践されてきた巨人の言葉の筋金入りの鋭さに圧倒された。

その時の研修のタイトルは「その人の生きる力となる作業を探して」であった。2015年、この続編の研修「地域で作業療法士が活躍するために」が行われた。いずれも先生が命名された。2回を共通して「OTは介護保険制度などについてしっかり勉強して頭の中の知識を更新し、利用者が元気になるためにちゃんと作業を提供しなくてはだめ」というメッセージがあった。

ここには利用者が生活を活性化するため、そして障害をもち高齢になって困難さが増えても、その方の持てる力を生かして生きることが支援するには、作業の力を生かすことが何よりも必要、という先生のお考えがある。

涼風では積極的な機能訓練が行われており、この考え方や機能訓練がうまく結びつかない読者もいるかもしれない。訓練は「お楽しみ測定」という地域で生活するのに必要な身体機能の独自に開発された評価に基づいて行われる。お楽しみ測定の説明には「この測定は元気のものさしです。元気であるために今の自分を測ってみるというのがねらいです」とある。私も被災地の高齢者への健康チェック講座を行う際に、この測定を使わせていただくが実に使いやすい。作業療法で作業を用いるには、利用者の心身機能や能力を評価して、最善の方法をとらなくてはならない、ということだ。

残念ながら、今後はこのような研修会の講師をすることはないと言う。だが本書に、目の前の利用者のために考え尽された作業療法の実践と方法について書いてくださった。評者も不遜ながら作業療法を教える立場になり、対象者の生きる力となる作業を模索する作業療法の実践が実に少ないことを痛感する。生活行為向上マネジメントが出てきて、こうした作業療法の貴重さが注目されてきている現在、地域で堅実に実践してきた著者から学ぶことはあまりに多い。地域で従事している人も、病院で従事している人も、ぜひとも手に取ってほしい一冊である。敬愛する後進の一人として、本書の完成を心から感謝し、お祝いを申し上げたい。



● 石井晴美=著

(四六判/236頁/2,400円+税/GBR/2015年)

▼ 評者

小林幸治

目白大学保健医療学部
作業療法学科 准教授、
作業療法士